

平野恵美子著『帝室劇場とバレエ・リュス マリウス・プティパからミハイル・フォーキンへ』

村山久美子

著者は、ロシアを中心とする舞踊、美術、音楽等の芸術文化史の気鋭の研究者である。本書は、その著者が2009年に東京大学に提出した博士学位論文『バレエ《火の鳥》の起源：20世紀初頭ロシア文化と帝室劇場』を元に、その後の新たな資料を用いてほぼ全面的に手を加えたものである。

20世紀初頭にロシア人によって創立され、国内では一度も公演を行わずに欧米で活動したバレエ・リュスに関しては、活動自体の研究は、ロシアよりも欧米の方が進んでいる（ソ連時代には、バレエ・リュスに関する研究書はごくわずかだった）。

しかし、19世紀の古典、マリウス・プティパ(1818-1910)のバレエから革命的に変化したバレエ・リュスの作品の誕生の要因を分析するには、19世紀後半から20世紀初頭にかけての、ロシア国内での芸術や社会の動きを綿密に調査しなければならない。本書は、ロシア社会の歴史の流れを研究の基盤に染み込ませているロシアの芸術史研究者が、1892年から1915年までロシアの帝室劇場が毎シーズン発行していた公演活動に関する詳細な一次史料『帝室劇場年鑑』を丹念に読み込んで、文書の舞台記録の考察だけでなく、記載されている当時の上演レパートリーや上演回数も数え上げて、実証的に分析を行い、さらに、ロシア内外の豊富な文献資料も用いて、プティパの時代からバレエ・リュス誕生への流れ、作品内容の変化を描き出したものである。まず第一にその意味で、欧米の資料によるバレエ・リュスの研究書にはない大きな価値を有している。

西欧よりも数世紀遅れて18世紀にバレエの上演活動をはじめたロシアは、18世紀から19世紀にかけて、西欧の振付家、指導者、ダンサーを招聘してバレエを発展させ、19世紀後半に、フランス人振付家マリウス・プティパにより黄金時代を迎える。外国の芸術を移植する場合、どの国でも同様だが、専ら吸収して水準を上げる段階を越えると、自国のオリジナリティのある作品を求めるようになる。

ロシアでも、まず19世紀前半に、ロシア人で振付家(バレエマスター)になった初期の人物の一人アダム・グルシコフスキー(1783-1852)が、ロシアの国民的詩人プーシキン原作の『ルスランとリュドミラ』(1821)ほかを発表する(グルシコフスキーの師でありプーシキンと交流のあった

シャルル・デイドロも、1923年のプーシキン原作『コーカサスの虜』を創作しているが、本書では言及されていない)。グルシコフスキーのバレエは間もなく上演が途絶えてしまうが、彼のロシア的な主題の作品に関して著者は、ロシアの舞踊学の泰斗ヴェラ・クラソフスカヤの言説などをもとに、彼の時代は「未だ西欧文化の影響が著しくこれから逃れることはかなわなかった。だが、同時に、バレエの舞台にロシア的な主題を取り上げ、ようやく民族的なテーマに目を向けるという新しい変化の兆しも見られた」という評価に留めている。

一方、19世紀後半には、フランス人バレエマスターでロシア・バレエ界の指導者であったアルチュール・サン＝レオン(1821-1870)が、1864年にロシア民話を題材に採った『せむしの小馬』を発表し、その後、プティパとアレクサンドル・ゴールスキー(1871-1924)も、サン＝レオン版に基づく新演出を発表する。

著者が『帝室劇場年鑑』から公演回数を調べ上げたところによると、1890年代から1900年代、『せむしの小馬』は、二大帝室オペラ・バレエ劇場であるマリンスキー劇場でもボリショイ劇場でも、最も上演回数が多い作品の一つだったことが判明したという。現在ロシア国内でさえ全幕で上演されることはないサン＝レオン版をもとにしたプティパ、ゴールスキー版の『せむしの小馬』が、現在も世界中の舞台上で上演され愛されているプティパの『眠れる森の美女』などと並んで、19世紀末から20世紀はじめにロシアで高い人気を誇っていたという事実は、非常に興味深い。つまり、著者が指摘しているように、劇場側も観客もこの時期、“ロシアのバレエ”を求めるようになっていたのである。

ところが、ロシアのバレエが求められていたとはいえ、実際は、この『せむしの小馬』の観客からの人気は、「出演者たちの力量によってバレエが提供した舞踊の豊かさや可能性」によるものであったらしい。作品自体に対しては、『帝室劇場年鑑』に掲載されたバレエの台本や評論家ウラジーミル・ロジスラフスキー(1828-85)ほかの批判的な批評から、著者は、「ロシア民話を主題にしているながら、完全にロシア民話の世界を描いたとは言えず、ギリシャ神話とオリエンタリズムという19世紀らしい要素でバレエを色付けしている。異境の世界はサン＝レオンが得意とした、キャ

ラクテール舞踊を強調する演出のためにうってつけだったのかもしれない。『せむしの小馬』はロシア民話のバレエ化というよりも、むしろ19世紀の古典バレエのスタイルにロシア民話で色付けした作品、と言った方が正しいだろう」と述べ、この作品が本当の意味でのロシア的バレエの誕生ではないと結論づけている。

ロシアにロシア人のバレエ創作者が現れるのは、19世紀前半、イワン・ヴァーリベルフ（1766-1819）が最初だが、ヴァーリベルフは、ロシア・バレエの父と言われるフランス人デイドロの陰になり、前述のグルシコフスキーは師デイドロの強い影響のもとにあり、その後は、19世紀中のロシア人振付家は、フランス人の巨匠マリウス・プティパの補佐として創作を行ったレフ・イワノフ（1834-1901）のみである。つまり、19世紀まで、ロシアのバレエ界をリードしていたのは、外国人だった。外国人でも、20世紀後半の振付の巨匠、フランス人モーリス・ベジャールのように、日本の文化、芸術、精神の長年の研究と鋭い直観、日本への大きな愛で、日本人よりも深く日本の精神性の本質を追究し普遍化させた『ザ・カブキ』などのバレエを創作した振付家も存在するが、19世紀のロシアでロシア・バレエ界を指導した外国人バレエマスターたちは、長年ロシアに住んで活動しながらもロシア語を理解せず、西欧の文化、芸術を伝授してくれる役割がロシアにとって重要であったために、ロシアの民族性、精神性などを理解する必要がなかったのである。

上記は補足であるが、19世紀のロシア・バレエ界には、著者が詳細に論述しているように、『せむしの小馬』が人気を博しても、本当の意味でのロシアのバレエは誕生していなかった。

そこで重要性を帯びてくるのが、著者が力説する、1910年バレエ・リュス第2回パリ公演初演『火の鳥』の、「最初のロシア的バレエ」としての存在である。

バレエ・リュス創立の中心的な人物であった美術家アレクサンドル・ベヌアは、『せむしの小馬』を「低俗な紋切り型と呼んで激しく非難し」、西欧の観客がバレエ・リュスにロシア的なバレエを求めていることを考慮して、「真のロシア的なバレエ」を創ろうとした。著者いわく、「もし西欧でこれまで誰も見たことがないバレエがあるとすれば、それは「ロシア」を主題にした作品を本物のロシア人が演じる正真正銘のロシアのバレエだった。バレエ・リュスをバレエ・リュスたらしめる、他に代替物を認めない唯一無二の存在となるために、ロシアを主題にした本物のバレエの成立は不可欠だった」。

バレエ・リュスの『火の鳥』は、完全にロシア人振付家の時代が始まる20世紀ロシア・バレエ界の先駆となったミハイル・フォーキン（1880-1942）が、ロシアの民話をもとに台本を書き、演出、振付を行い、クラシック音楽に革命をもたらしたロシア人作曲家イーゴリ・ストラヴィンスキー（1882-1971）が音楽を担当し、舞台美術に画期的変化をもたらした新芸術派のアレクサンドル・ゴロヴィーン（1863-1930）が共同制作することで、真のロシア的なバレエの誕生となっただけでなく、それは、「ロシア民話の世界を通して、西欧と東洋をも融合する新しい世界観を秘めた、20世紀の新しいバレエだった」という見解が著者の結論である。

バレエ・リュスの『火の鳥』に関しては、このバレエ団のスーパースターであるワツラフ・ニジンスキー（1889-1950）がこの作品を踊っておらず、主役火の鳥の振付のポキャブラリーが19世紀のものからまだ大きな変化を見せていない段階であるため、ストラヴィンスキーの音楽の意義が最も重要視されてきた観があるが、著者は、真のロシア的バレエの誕生という側面に光を当て、このバレエの重要性を証明した。

そして、『火の鳥』の真のロシア性、20世紀の新しいバレエを生むために大きな役割を果たしたのが、19世紀末から20世紀初頭にロシアの舞台芸術に参入してきた新民衆派の美術であるという結論を導くために、19世紀から20世紀初頭にかけてのロシア美術史についての詳細な記述がなされている（むしろ、この部分の叙述が最も力強い）。

日本では数少ない、舞台美術に主眼点を置いたロシア美術史という側面でも、本書はユニークな価値を有している。

最後に、今後の研究のために一つ希望を述べると、本書では、『火の鳥』以外、現在舞台で見ることのできない作品を多数取り上げているが、そのほとんどは、台本、制作者名、出演者名とわずかの批評での記述になっている。劇場で開演前にバレエのあらすじを読んでも舞台の様子は思い描けないのと同じように、本書のバレエ作品の記述からは、いにしへのバレエの舞台に思いを馳せる楽しみが十分に得られないのが残念である。バレエ作品を叙述する際、図版をより多く用いることもさることながら、演出、振付、踊り（パフォーマンス）、音楽、美術の描写やそのコンセプトの詳細な調査も加えて、舞台を想像できるように描き出せると、舞踊の歴史書に膨らみが出、さらに興味をそそられる本になるのではないだろうか。

（未知谷、2020年7月刊行）